令

へ4
1521

早稲田大学図書

とふやうの雪まろうしぴみいうまをわらうひてうるく
ありてぬくとくるるこの頃ひあらうのをいきはむ
うくぬこうとふむしきてなるとぬうなるるの中に
をうをたくしくみゆるぐうちやおもひて。
みゝ山のくらおぼえてゐる井もうるとてうれく。
をれうとうするついて。ごうよなるまう人のたうて京。
よみうまうちるすこういうゆうくれまうるとて一
たいてんやといふぐまのやちくれまうやいとうう

早稲田大学図書
へ、ヶ

たくこゆしぶうぶこころなり。よゐんとおかにちく
よみてぶろはいなゝ（りやといふ。きちゐんといふ。
ちゝくかけてずゝとりみつてにてそふ。
くちちゝひてこちふもかゝすぶうくとちれぶをえ乃
ハしゆくもまふふくしかゝねぶてうれてこちう
せんだりえてやりもちてよとてぶとくんう
角ぶやうどおりひめくゝしつぶれ
はくふぶあゆき

うゝふ人のあうちりおりふことりのれふ声よいつ尿を。
うゐもとゝふり。第本れ祭のふのあるゝちゝれをちて。
なふの第ちゐよれおとゝに尿ちくみ乃声をきちく。
おりへるゝうろをれてこれ祭といぶのとりれ
ゆゆるやうにぶひすてゆくとちみちちゝいう。荒
このおちやゝまのゝくふちとうみたまへるおまつのえ乃
みてとうけつきてぶこちたみちくゝるちりゝ乃れ
おほやゝはちろゝめるをつゝれぶそのおちゝ祥乃

こゝろ深くてかきまくもの事ゝ仏ぞこゝかゝるのと考
うゝめゝぎこあゝ仏ぞハゝくいまゝ弱ゝぞ仏ぞ
にゝまれて神代よりあはゝゝくゝ伝ゝ仏ぞふゝり
のゝこゝよまんをるやゝをとゝちゝ人の声を聞と
いゝゝ仏ぞ句ゝそゝいゝゝそゝゝるもあゝ仏ぞ二句三句のも
ありて仏ぞ字の数もゝゝまゝゝゝゝ仏ぞこのこと
をゝきゝをのゝこゝと仏ぞ五句廿一字の句をゝゝかゝね乃
つゝちゝゝめたまひけゝる今のゝをゝんの大ゝ神ゝをゝ

ゝゝちまゝこのよみまゝへゝるゝとゝゝゝ仏ぞ甚深玄妙あゝ
ゝゝふゝゝゝゝゝ仏ぞゝゝゝゝゝゝゝゝ仏ぞゝゝゝ人ゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝの姿よゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
世一字の詠ゝなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

雪さえてのちこなれやたちの
うらねよりゆるとふぜをつむ
かくはり心は法なくぞいふ詞法はし。ぞれ神ぞれ。
のちまるとふみもいとしてふは法あるり。
山ぞるとに頃ねといふ詞法あるり。
たゝわはりへることを。ぞりゆやうはてぞれ
ふるめりとぞゆるは法るり。雪ゆえてみとふなれ
うもいとぞ頃ねるきゆるとうたてもいふなれば。

せんをへな詞なしさはふるの詞まつゝ聖あさこの
るれいなるゝ雪き詞もまゝきるしあまねくせう
みちくてだれもたるとゝぎりて。世一字三つくる
をうことふなりぞふをとゝにやをくして。
ぞゆへやうとむねゝてるめは雪ぬとゝちるき
めるりぞうれゝまれは雪ぬとあるゝ初んぞち
世一字まてゝわりをえゝいとゝねゝるりぞ乃とふ
いゝんとはりふんをするゝ所てむゝとゝ二をち

をのこたちそのゝ乃あさゆふにゆるやうこころ
うゝれ海のすへてもゝとゝいふきゝとゝをちこたて
くいちるんよりそめんのうちよりいちるれ秋萩も
暑ゝみをもをしとゝいふくゝしものうまて泊をまさ
或ゝ弟をとゝいふて本となり身をとゝて人のうへ
とる乃やうのことわりなきゝていてくゝるとり色
三三度ゝ乃度吟しゝよゝ乃泊れとわりなりれく
かゝいゝくゝれさりくゝわとゝうゝんゝくゝるりそれころ

つきてゝくゝれ海ゆるやうこちるをりこうゝれ初人の
うちあるゝとなれゝ所ゝ乃ゝ十もよあゝや乃乃
泊の程あゝいれとわりちるれ泊いてこぬるりゝ乃
ゝ乃ぬてあり芝ゝ首の所大ゝ海ゆるゝ三な
れ百人の詠能めゝて人めつゝうこうれんと
ゝよんゝう所れとゝとわゝれて人みこうれんとゝよ
をもゝとゝて世ゝとゝるゝことをゝうんゝて鳴ゝ遠
く為ゝ白ゝ火ゝのゝうもすゝしゝるゝやうのゝことをゝい

けうくわのいちりてづねの人乃こゝろ〳〵ゆゑ〳〵きぢらい
をわさと引こゝへてだゝ我こゝのゞちめわゝせんゞを
たくめるそ才一のやまひちりくるぢるんよりも一ワ
のはゝひさまゞぱゝとをゝゞとゝすゝきをふ
とゝてゞやゝに白ゝかゝねゞわゝくゝひかゝぬゞても
変ぬ方のゝちりぱゝれよゆゝゝとあるも自然の
情をゝゝちゝひてだゝ作り花をアるゝゝゝゝ色ハ
ちくせゝも露ゝゆゝるゝもゝゝぬゝまゞども散けて

胡蝶飛来るゝ天地同机のゝるゝゝ也我人をよ
むゞゝそゝゝゝといゝへゝゝきゝゝんゝてゝあるゝ
のゝ川ゝゝみゝゝゝ院よゝゝゝくゝゝゝ下流ゝゝてゝすま
ゞゞゝへてゝちゝえゝゝ犯人のゝゝよゝゝちゝんゝとするゝゝゝと
ゝゝゝるゝゝゝきゝゝゝゝゝりゝゝゝれゝゝりゝゝもゝゝゝゝゝるゝゝゝき
ゝゝゝゝゝをゝゝりゝゝゝゝゝゝを平易ゝゝゝて理たゝゝゝ何
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれゝゝ自ゝゝくゝゝゝゝて別ゝゝゝゝふ
ゝゝゝゝゝむゝゝゝゝ人ゝのゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なをそれにとゝまるべしとなり。人九赤人色なるを下り
てのぼるゆきこゝにもとゝまるべきなるへるや。
こゝりてこゝにみちぶくりてゆき日赤ゐとこ
あるりは○のこゝによく心をつけてこゝへ
ゆくこゝろどころこゝにあれば万の名字をつくりぬ乃
名字とふんありそれは四あり歌字平仮とわち。
詰文の法則をなせりこゝろがけよくもかこゝわち
神乃ゑゑぬるわつくりきこゝろんなりける。

たかゝんちなの四十とゝあまりせりをこゝすてあ
くもこゝにんをはへあるりんは神のゆくこゝやまと
こゝろれいちるこゝそのうんち一字こんあるどゝ
をあつめてんをるゑぬるへゝをとかをあくせてを
ちるつゝをきをゆくせて月ちゑすることゝゝから一字
ふんをきこゝるれと河此中ゑ入てゝ一字のかをきこと。
ふりのこゝ乃ちゝゝふゝちるれゝ一字をて一そのんゆく
まり一字をて一そのん要すれゝせゝ又入るこゝぬゑ此

入うゑ仏一字ふよりて一首ゆえんぶこころ所まい所
よわうすその夢ゆへさいひさまぶつうちにぶ所こ
をしゑ法いちまい形り詞よ法をうつれぶるすを
法よたうへるとあり。うれしとは法るき亦よ法をうる
うれちり。ち中に水をやくふと我さうれよいひ色せ。
大古かんなのなうしは時うぶあり声あれ所我
なやうんれぶをうつてす糸なるものり。未の
うんなをもてどとのんを制せんやうんなのおりれと

いふこいふるれ世よれあうすぶの物をうる加こ世も
きちりかんなる法をうれぶうえ法去のみる
はうるうこ。心いふるものりうんなれ死る
ものり。心乃自主あふうんなの乃ゑ亦ちんや。
その河の物妻するやう。問ゆんまてすうかれる問
河まてぶのうれる問句或二字まてぶのうれること。
みうるよゑどいはるまとうい結てうすへ
古今
はうるれ咲ようも定川乃

やまのくちひすらゆるゝ雲

風雅

山のくちるゝ原たゝさい

とゐぶさくゝぜんゆるるゝ

是共三夏之之の所せ所の人ゐゝくて姿らゐり。

さゝれ心物ゝとてもきゝゝにあゝすゝ古今撰去

すてよかゝれとゝぺゝ下用ちゝれ作去をのをす

やまひこうゝふ月をけゝゝよゝる

古今

橘くれ去くゝれるゝたまも

ひとのゝくろよあゝれやいせぬ

さる後拾

宣家ゝ去ゝ去ゝ花くゝを誘ゝゝゝも見ゝのるゝやう

の橘とゝ乃宣やうゝゐあゝすゝ所ゐ橘をよひていゝへ

来ゝんゝむゝひて去やゝに教ゝる詞るれゝゝをくする

といゝゝゝくゝぜぬこそるひて待れゝ見ゐ橘を

ちるれゝ下三よりて上の人乃物をゝ流ちり

さゝゝれをのけゝに久ゝくゝゝゝる

人のきゝゝゝけるゝすよみけ

あるものとなりてたてれ桜をる
とふまれなる人もまちけり
よつゝ待とうたとゝぶらつく人まつかえてもをとまつ
ちとまつこゝすてゝいまこゝぬをまつとゝふなりけれ
ゝ人をまちつもをるとゝ詠のこゝまぬとかくの
ゝ　下ニさ月まつをさちるの類ハ食てる一
続拾
里ゝとなれ所ハ久よゆくをる
われを別とうれをしむん

新古
けふとゝへゝもうこゝまてもゝ春を
こゝやこゝ乃みとゝ知ゝけるれ
いまこゝ四月ちるれもゝそゝ言春ゝそゝ去ゝ去ゝ三ちるゝ
上下の詞乃ちゝそゝあゝて物をる也
古今
さ月まつ花ちゝとゝぶらゝこゝま
ゝまもなちるゝそのゝるゝ
同
ち月まはをゝちゝ風のゝをかけく
むゝ乃人ゝ袖ゝこのゝゝをる

此初五日の月はかすみ初のさ月まつ宵月せみ月と時と
もる郭公いまもなほ聞ぬ人ぞ聞ける
あくぬ也後のさ月まつ宵月せさ月と時ともる橘
さゝれぬ香とかくとゝ也今ともに下にはりて上あし
物するもり

古今
さみだれのそらもとゝろしらぬはのまに
いるくやそふてなきうせぬふく

拾遺
なのみこそうらみ春のすき

かすみやとりよくやとりこゝろ
この古今此所ハ月日のとくるを聖てさみだれのそら
ふこゝるを実のさみだれ拾遺の所ハ実の時日
をとゝ聞毎月とゝいつも同ゝるあらん

古今
世中をたゝてはなれなりをハ
くるのこゝろハ此所ゝをのゝまし
ものゝさくをもつ散をゝしみ盛ハ而をゝ
とゝ此ゝるゝ此所あゝのゝ同ゝ此ゝ世の

なつふぶ梅といふものなくふぶきは人乃ふみとる人なと

続後撰
はつ雪のなかれてさくる梅乃はな

春のきて雨はふるとはさくらん

見ハ春こんあふもはなはない

風雅
一とせに二度はなるらんふうえん乃花

さくほのこころろあるぬるへし

見ハ梅う春こあくるすり。春の人と詣いつみす

人ハこりるわくらり

後撰
雪ふきれぬ山は身なくとも

こころろやいくてはるくん

見ハ谷はんあるとみやうこいか

新勅
ゆくくく流つ川ちるこをたて

たるのこころやさむちるくん

見ぶふくすむ人のくらをいか

七月の晦日の日大ぬるてよめる

古今
夕はすくるをくれ山は時しの乃

こゝのうちや秋いくほんん

家集

くれぬゝてなすすゝぬる宮の

声乃うちやはゝへぬゝん

このへぬんいすゝへのゝのなゝゝゝゝゝと

うゝたゝへてまいぬんまや

光月日乃なすれゝもゝゝまのゝゝとゝゝぬ声乃

うゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ

古今

たのめつゝあてゝゝゝゝゝゝ

うゝぬゝゝゝゝを人いゝゝめん

後撰

いゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝん

ゝのめゝゝゝゝゝたゝゝゝゝゝゝゝ

拾遺

たのめつゝこぬよあまゝゝのぬれハ

まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世ゝのめゝいゝゝゝゝゝゝゝゝ万葉集ゝゝゝゝゝゝゝゝ冷憑

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そくさはしちるたきつかし
さのえハ人をとうみたるする
ゑハ人よりものまをむる三つす我するのをとうり。
かう河ハ奇三よりて物をたハ白のんたてあかきすをし
後撰 東まろうるふるあるかをくちをん
るりをよ川ををうる三波のををて
いをくるをりかをのをひよふ
うやまをくるまをのをふるみる

於き あきうををむをくあるをすれ
ゆくうををるをはるくあるん
初のるりをふるりあををいるを後撰の河芳三
あをハなり後のゆく方ハゆくされをいり芦
河河をてんををるり
古今 をを伝のあをれかをよりも舟も
のせをたよりれをるをりる
し牙三のもれ字をハの字をのをのをのを

もゝなすれいこそ。さのうゝとゝちり乱れ。家と舟り
たゝ〳〵。中ゝちゝ風よりもゝとゝさるゝあゝふちり。一字
ふよりてんを物もるゝといちつゝ戸のゝ
から乃ゝをゝりしいてつゝ。ゝ紅もてゆゝふなるきゝぼ
ほゝをゝさぬゝもはゝくすゝ。ゝ。こゝゝ戸ゝ物ゝ一詞も
上下ふよりて物もるゝとゝやりをゝせおゝくゝみゝちり。け
すゝて詞ゝをゝひゝるゝゝるゝゝとゝてゝにをゝとゝいゝり
世てふをゝ又法ゝなゝ。むゝゝゝこゝの名ゝさゝ。ゝ紅ゝえ

けるゝゝるゝ。ゝつゝのゝ法ゝよゝゝひゝくゝめゝるゝゝといふ
ゝをゝをゝまゝゝよゝ。ゝ乃ゝゝるゝるゝの三。揚鳴暁筆
ゝゝそゝけゝゝゝみゝゝゝる。ゝ乃ゝゝいゝひゝゝりゝめゝるゝも。
いゝとゝのゝゝ乃ゝゝとゝゝるゝゝゝまゝゝれゝくゝまゝれ。詞ゝゝよ
ゝゝゝと。今ゝてゝよゝゝとゝいゝ。ゝ紅ゝゝさゝいゝひゝくゝあゝり
ゝゝゝんゝゝゝと。ゝゝいゝと。ゝゝゝゝゝゝゝをゝあゝゝせゝて。色ゝゝゝれる。
下ゝにゝてゝく。泡ゝ色ゝゝゝゝ。ゝゝ香。ゝゝ言。ゝゝと
いゝよゝゝゝてゝよゝゝゝゝゝゝゝ

いろくく下のうるはもくよてにくとるり。
そはといふしはの字てよはちりそよ「内上」そと。
「けの字の下にいつる次にのす」
そを「内上」そう。そそ。そる。そのそや。
そもやしの下のうるるれてゐくちり又そし。
そしも。をを助字にて大うる心なし。さ
きとかてよりてそうしに助字こんを具
もるそるるりり又そをうそをそそ。そとる。
そそや。そそう。「助」かく二字をうさぬ。

又そをとそそ。そをとやちくこ字をうさぬ。
四字も五字もうさるもあり
色は此下にうくくき詞てよはらりるれろれる
どうふきて四十二字いろくの順にすり申。
つねうるくし。弱ちくこ一時まうはら
てあり。四百餘言をちりまうさもくくれ
小拍子教の詞にてくし。あまくきちうて来
きはうの詞はうにのをうをのおらよそは

きいろく。きいつよう。きいろ。
きいすこし。きいすこし。
ゐくひまでいる詞いくれぬ詞あひとと
いひきこのといふ下のるよりてゐ將要
きいすりすし下こるきこるくしまるし
きいや。きいも。このてよいたるこ可然下こあり。
きもかるすりてるふくるしいの名。和歌。
ゐこふくるに

色よいよつる詞ふこの下といさくるんいくこのるる
くし。きよいろきよ。きよいてるきよいてはし
の歌より。きよすこぬるきよすこゆくるれいて
きぬ詞上言。下のてふきて將をるもの詞し
てよい、色よ。色よう。きよてきよるきよや。
きよて色よも。色こて色よもや色こもて
助ハきよを。きよう。みきすこものの歌
色をいよつる詞ふの下こうるもあり。

きもつの色を色てゝ色をいくるゝ色をいくく
の歌より色とする色とすくれる色をす陰
のまれいくれぬ泊上三句下のの風よ
りて心の物をるとて上三句てゝをいい
二字色をゝ色をゝ色をゝ色をゝ色をゝ色をゝ色をゝ
色をも三字色をこそ色をもや助ゝ色をゝ
色をゝ色をゝ色をゝ色をゝ
しゝよをの三字の下にいつる泊ゝ子三句餘言

ありその一言みる所とちがひまして空十
二字よりゝ物書ていてん泊ゝくるを
ゝゝあゝんゝゝゝ

れしを弱うしくれぬのちるにたがはいの人
ちるに天下の人諸国へくれぬをもるる
つるねといふるを泊いとれぬ絹をつるる
取ちるれいなりをよてとぶ世下にそ
いくるふよふひてちきりてやとれてると
いくるの下よいくる狩てふくの
ちいかさねていふを結へたるしてよと
をまるひて奇ようんといはすあるうに

奇雪ゆれいてふくいはのつくかちへるすのく
うしくうくをけくふの詞よていゆをまり
むりてふくの名さへなりし世の人乃
よくよめるをうよへ古奇よてよをいはん
四宮へくる奇すあまくなり三三そ来いつへ
けとしれあつくひをくてそのくをきくに
わうれくうにをくくれふくをるく
あ一重をけりてあつるきわて原

をぶらすこたつをあをてゝもかりハ
どちきたちとすゝやなすゝる
月うけもとゝもひとつよゝる秋ハ
いはまをくゝでをゝんゝそゝ
たゝ是白点ゝもふてふをいちゝるゝ右
点のゝゝ詞を自在三するゝ点よりも
まゝりゝしゝ仮字をもてゝふをいゝ
名付ゝりとゝゝ

かゝ文字をあつめて心をとゝまゝろ付詞のいひさ海す
五ゝさゝのりゝ又法三あゝひさほの詞井のつゝさゝう
四ゝ是をもゝひてゝゝすゝふるまゝハ人俳
通ゝゝゝすゝ者の詞よいゝゝゝんつゝぬのゝちりその
いつゝさゝいゝ人さ化をゝいゝを歌在のゝちを未来のつ
うゝめいふをウ井人よをゝゝみるゝと下知といふ山五稚三
人のゝゝ他ゝつゝ自をゝぬゝゝハ
このゝゝ山乃さゝゝふつゝろひぬ

（訳左）ゆくくるもものとやらうはし
月を見ハ（ウハサ）ひとせとせ（下紀）（他）ゆく
ひとも（自）やこともうをハ（未来）て
自他をうぬとこの君ゆく鄙ハ他と鄙ハ他と以
とある人と君ゆくとある人と他と鄙他ある人
ふ新自ともゆ。先又新ハ自とゆとある人と鄙
他ある人新自とある人。言を以て言る通
てこのゆをハ。自の通他の言といひて別ことなる

あ〻ゆ特てゑをちるすとわりを上ほ〻一そ〻て
もおほ也〻一

きみ（を）ゆ〻ゆ〻ゆ〻も人（訳）ハ（未）ハ人

ここ（ウハサ）ゑ人〻ゆ〻ハ人ハ（下紀）てつめ

このきみ〻ゆ〻をけさ〻つる〻ゆ〻ひて〻る上ゑ〻る上ハ上

又字のこふもかさる〻ゆ〻ゆ〻ゆ

わらはこゝばくさを自他部より言ふいろ幼より
老よむるまでうみよいして用をなすつゝの泊く
ゝ所をとゝてばるとわかりるかれうとやもれる
ゝとゝをひいてせるやうよおかるゝ光の泊よてゆゝ
よりきるゝ所をるゆゝをこつねの泊ふゝとゝて七種なし
所八世一字のさゝりあれ泊きゝてばゝゝをれゝ
そ考よたうひゝるこのゝ言をかくついてよいぬをお
えゝのゝるつゝひをもゝんゝらるゝ〳〵ゝるはひゝゝ

てむつりきゝてふもあゝふゝゝゝゝ八百姫こぬゝ我
ゝゝるとうゝ風よをゝゝ我ゝをゝるとゝき帆をかゝて
和名乎加豆良今ハ俗ニシタカヒニノ書雑冠木ヲカゝテノキトヨメリ
とかくいゝゝほのゝよにゝゝいゝゝゝてとかくゝ後ゝゝるゝ
ゝしてぬゝもをゝもゝゝゝゝ

うつせる肌神佛（もな風方ちれいんこたうひ。
ことわりよくぬうへるひうとをかくるぶこあるす

祝　いくひー　いくひいふ　いくいんふ　いくくへ　過去　現在　未来　ウハサ　下知

嘶　いいいいいいえー　いいえいいを　いいえんいいえい　いいえ

厭　いとひー　いとひいふ　いといんふ　いとえへ

去　いいぬる　いいちん　いねー

寢　いねー　いぬる　いねん　いねいねい　ねよいねよ

入　いそきー　いそく　いそえん　いそうへ　いれー　いるー　いるん　いれへ

出　いてー　いつる　いてん　いてへ　いてよ

急　いそけー　いそく　いそえん　いそうへ　いそけ

祈　いのりー　いのる　いのん　いのへ　いのれ

座　いませー　います　いまさん　いまさえ　いませ

白　よかひー　よかひふ　よかりん　よかりへ　よかりく　色　香　同

調　とくのひー　とくのふ　とくのくん　とくのくへ　とくのよ

沾　ぬれー　ぬる　ぬれん　ぬれへ　ぬれよ

言　いひー　いふ　いえん　いへ

解　とけー　とける　とけん　とけへ　とけよ　氷　雪　級　心　同

散　ちりー　ちる　ちらん　ちれへ

折　をりー　をる　をらん　をれへ　居

暗　くらー　くる　くらん　くれへ　くれよ　日　月　雲　雨　心　同

散　とひー　とん　とへ　飛　濁音　濁音　同

契　ちきりー　ちきる　ちきらん　ちきれへ

急　をこりー　をこる　をこらん　をこれへ

奢　侘　薫　朴

別　変　帰　語

渡　顧　苅　隠

翔　堪　頼　仕

霞　立　絶　作

寄　尋　染　願

流　靡　生　老

馴　報　植　生

鳴　掬　移　織

落　後　朽　宿

追　贈　曇　焼

置　悔　暮　紛

逐　まよひ　まよふ　まよりん　まよりく　まよひゑ　まよひを

煙　けり　けり　けるる　けりん　けりゑ　けれ

吹　ふく　ふく　ふくる　ふくん　ふくゑ　ふけ

梅　あそひ　あそふ　あそる　あそん　あそく　あそへ

待　まつ　まつ　まる　まん　まふ　まて　まち

滓　ふり　ふり　ふる　ふん　ふゑ　ふれ

更　ふけ　ふく　ふける　ふけん　ふけゑ　ふけよ

洗　あそひ　あそふ　あそる　あそん　あそく　あそへ

増　おきり　おきる　おきん　おきゑ　おきれ

古　ふり　ふる　ふりん　ふりゑ　ふりよ

氷　こり　こる　こりん　こりゑ　これ

阿蘇　日本紀　あえ　あえる　あえん　あえゑ　あえよ　あえね　万集ニ　あゆそヨリ

逢　あひ　あふ　ある　あん　あく　あへ　あひを

榮　さう　さう　さる　さん　さく　さへ　さえ

消　きえ　きえ　きる　きん　きえゑ　きえよ　きえね

茂　しけり　しける　しける　しけん　しけゑ　しけれ

轉　さへり　さへる　さへん　さへゑ　さへれ

開　さう　さう　さる　さん　さく　さけ　さかね

乱　さわり　さわる　さわん　さわく　さわけ

時雨　しけり　しける　しけん　しけゑ　しけれ

騒　さへり　さへる　さへん　さへゑ　さへれ

泛　けえ　けえ　けえる　けえん　けえゑ　けえよ

知　しり　しる　しん　しく　しれ　しりを

敷　しき　しく　しる　しん　しく　しけ

拾　ひろひ　ひろひ　ひろひ　ひろへ

燎　もえ　もえも　もえん　もえは　もえよ　もえよ

塞　せき　せき　せき　せき　せけ

詞のみくさまつの原てかくのてゝ。そはの吹て
よりて。花よりく男ゆゑとなるひいりて。さんり
のこれる詞。花よりるゝ。こゝ出る。こゝ。山川
等なる獣。虫。巣。器材。の外。こゝら詞。の形。等
いつくゝ。こゝ。ものせ。それ。こゝ。こゝ。くゝ。所。とる原
原。根。ありかくいひてもなんねるゝ。めれ。見。と

きくゝ。こゝ。ものと。位。とつけて。言。と。そゝ。ゝ。のゝ
るやうを。こゝ。出。へ。

見　こん　こん　こん　過去　現在　未来　こゝハ　ウハサ　こゝよ　下知

花。大。ん。を。こゝ。る。て。げ。詞。の。こゝ。る。去。こ。わ。ゝ。ま。ゝ。ち。り。
こゝん。こゝ。こゝん。こゝ。こゝ。ん。こゝ。こゝ。ん。こゝ。こゝ。

同
ともにうつるよの
月てゝ
いとしき

同
むりやりちゝと
ゝゝと——

うゝ

もゝ四ゝるゝ
もゝ又所ニよりて
ゝれゝねゝえゝゝゝ

二句を生
をゝ山ちの
うみをとゝい

三句を添
ふゝ〳〵雪の
ぬるとゝいてん

三句を生
よそにゝハちをう
あゝれとゝ〳〵

二句を添
こぬ人まりと
ふゝるよの月

見もゝよう〳〵ゝゝるゝん〳〵ゝゝやゝゝせゝるん〳〵ゝゝのせゝゝせゝよ
ゝよ
をゝあゝゝゝなゝ〳〵ゝゝゝるゝん〳〵ゝゝるゝん自他特ゝゝるゝとゝゝゝ

同
いてゝゝゝよ
ゝゝゝりこのねの
ゝゝゝりゝ

同
をゝうむつゝ浅
うけてゝゝるゝと

二句を生
ゝゝよゝゝつゝゝゝゝ
あゝゝぬゝゝのゝゝを

三句を添
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

このゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

勢能の人なとい河毎に奇異をやけき河ともなりちん。さいやしき菊のんの声ちるしいかうきこゝかけちるをとすりるをとうつるも きゝぬこあゝねいうてけこゝく乾よりいやとみゝひゝふくくつゝ目ゆ〳〵とふつよいてこぬいこの垣のわゝ目れちそのよりて。鯉をえてんと目〳〵ふりとゝるゝ〳〵てがゝほ名もきゝぬけいをくとりてゝねゝまくゝれもたみゝふの奥れうちるしいふくゝゝこけちて

ひてゆきゝんのちゝくいゝゝの中にきゝるゝつら鼓あちかゝれうゝみようくゝゝをもんのまゝにゝうえ結〳〵れ心八風のとく河波ふゝりれふゝぬるゝれゝつゝちゝくゝんゝちれ河いつ原りれこあゝゝ下次ゝ三句三句をゝ〳〵みゝ皆ゝゝきゝゝ〳〵れゝのゝふゝてやゝぬゝるもゝかゝ乃ゝ〳〵たる句三句をゝ〳〵て行ゝ〳〵てゝゝ結〳〵ちり

聞　きこえ　きく　きゝ　きく　きゝ　きけ　ゆ上

きし　さはりしぎゝんぎゝんしぎてつのぐくひ
いくもある一上下二よりてみ物さへ一

郭公声きてしよりきゝにてる時風　皆自也

きく　さくぐさけぱきてにさゝえぎこやぎゝえぎぬ。
いくもある一みり物さへ一

よものあゝ一を
おくゝゝるそきく　同

いくそきくいつて
待りのこゑ

きゝん　さゝるやぎゝんぎゝんぎゝんぎゝんぎゝんぎゝ一。
くもある一みり物すて一上きんの下三つよ同一

あすはやきゝん
うりなひのゝる

ふつて　今をそへ八自ども
きゝん　他も如一

きゝハ　さゝるぎゝたゝぱちるを自他通用なるて上三同一。
今をすゆ人のうへ三も我さへるもいくる

さうかうらん　麻のねさかい
波風乃ふる　爰もむすび

きけ　きけうし。さうてよ。さうちん。さうてよ。くろもある
又物をくし。きけばといふあるすきをれりよ。をそる波の
をををそきけといひても

きけゆふつを乃　ありてこすする
をのふるく　波のきさけ　他

思　ゆもひし
ゆもふ　ゆもひ
ゆもらん

おもひし　こはりし。こひらん。こうらん。こうらもある
物をもること上三句

ゆもひしまに　こる人の
萩をうえつる　あるすきゆく　共自

ゆもふ　こひ。こぬ。こよ。こうね。あとこそこ。ゆ人下をるれと
くいこ八物すり上

くるすもも　自
月をそこ

土のある中に　自
人めとそこ　をやこふとすれ　他

おもふん　さうん　さうん　さらん　さうん　さうあ　さうあ　さうあ　さうあ　さうあ
ゐる　上下こゝろ　てう　物す　上こゝろ
自他をふてうす

くれいありても　自　さくらんの　他
月をおもいん　つれなちるん

おもふ　さいなら　さひせい　おもふれの歌　自他通用
こゝも自他をわく

かくしのふ　さいく色ろ　自　神のけてい　他
いてぬし　家をおもふ

おもへ　さうし　さよ　ふる　ちの歌　上こゝ
ものもの　ばとい　自　こゝ　ものこゝ

おもへこぬよ乃　おもへうよも
ひとりねの床　いろこの月　共他

形　ゆさし　ゆうて　以下れ上こゝ
ゆく　ゆけ　れいを以て会す
ゆうん

ゆく　家こみゆゐハ　いもかりもし
こゆこあと　他　川そひの乃　自

ゆく　波ちこたゆく　他　ふゆく未よ　自
あま小舟　もそるふへる

ゆうん　ふゆうんゆの　流風ふうる　三石をさい
おそそるふ　ゆうん塩ちこ　自他ワるへし

ゆふ　ふゆふかなふ　あすゆふふすて
ちりのるもんん　のこ原もも　自他面

ゆけ　みちさくし　茅ふてゆけ
月まちてゆけ　ふるの中ち　ゆけバ自

住

すみ　澄も心ふりて泊河
すむ　すめ
すまん

住いふふ　あれいふりハ　他自ハ
あれふり他ハ　ふる住あと
すみ

すむ　すむへふ　すむあふや　自
佛ふるん　人乃ふこぬ　他

すまん　すまんあふこ他こ　ゆさてすまん
すまんそそふ自こ　すふふの住と　自

をまい　いなりにをまい　すまいはくも　自他通用
あらうへ〜　家やとそう

をとめ　よの中い人と　たへてすめ心も　よろこと
さゝ〜山よすめ　うたよみかちすをめい自く　もろこそこそ

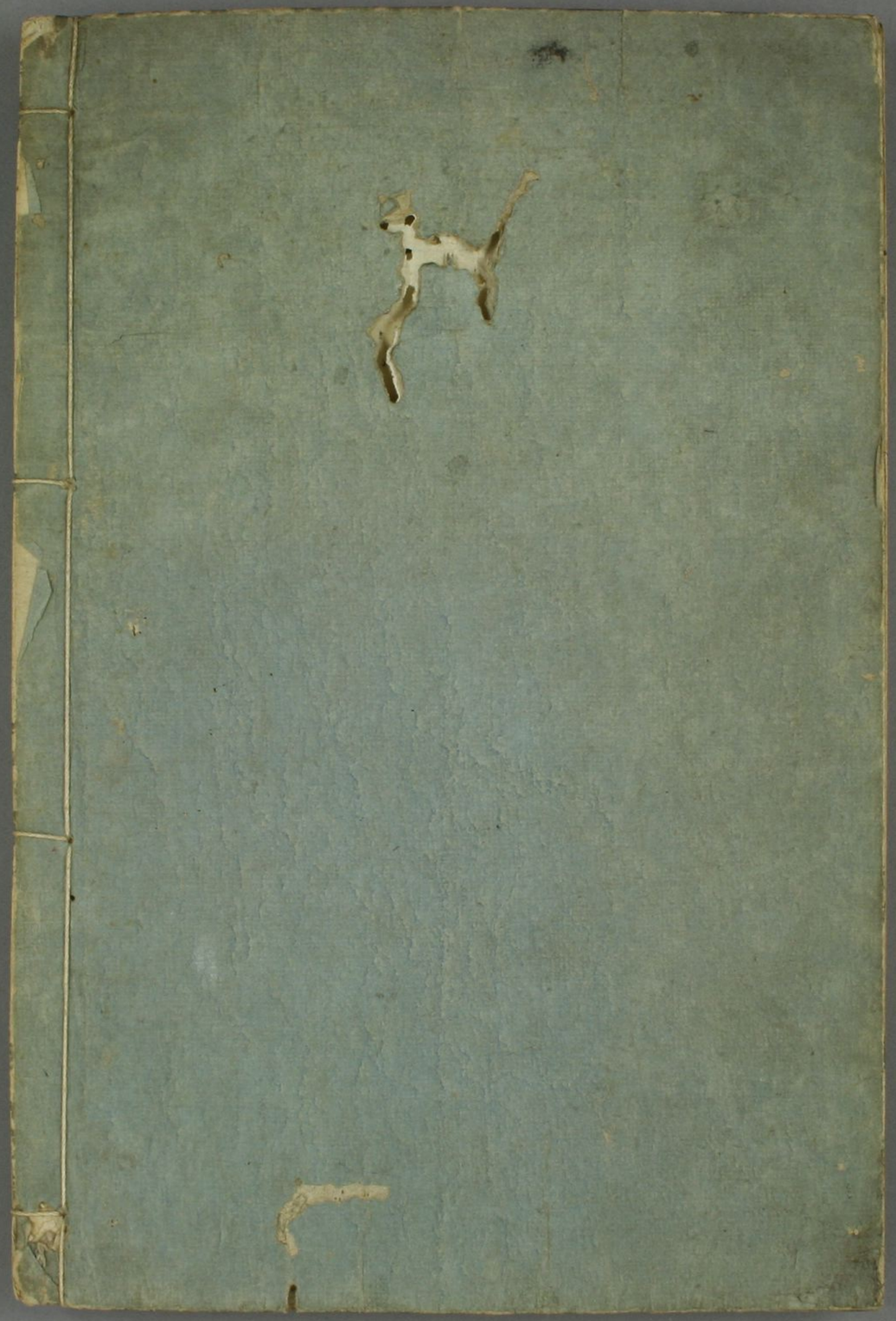
この一言よろ〳〵さる白のとやりきこえんつねの詞なる
とあ〜ゐる〜ぱてちるん。すい大や〜ゐのこゝふやり
まてぱたちにちるめ〳〵ふよふ。あ〜ぬとともをてゐる〳〵し。

しこゝふ〜うまれとうゐゐるものをもて用ゐ
ちるゝ乃ゝをゐのよ。ヲ〜ゐ我をさめ。家をとゝめ。人を
たちち。誠とあ〜ゐ。言語の大道よてむ〜いもの
す糸ゐうもゝこゝるとちゐ〜りを。ホの世とちゐ
て。詞乃ゐ〜のとゝ我ゝとゝひて。ぬゝゝになつみ艶ホ
ちゐれゝ。月乃人のぬ西ちをとて。憑紙先達のゝ人と
かり。大道ニいゝゝかゝ〜ゝちをゐ。ゐてゐゝをたゝ
〜〜より。大乃せゝまりて艱険の細路とちゐりかゝ

ゐちいひうて。大法とちがてとゝ久しくれハ。
別よなゝ姫ゝなとのあゝんきるやうゝふひさう
ゝるちゐ。たくいあゝ（ゝこの屋ゐゝ
いゝ（ゝかゐ屋ゝんてハ
ゝんゝ人のとゝれ人乃

みちゑ一きち

丙辰春洛東圖南亭ニ
筆をとる芦菴

ちいつゝろワゝハゝようゝてかゝふゐれのいきゝ
ゑの中こゐゝまれて乃ゝゐるを元長ゝつゐて
梓みゝてうしまゝるひのゑもゝゝえこゝの
せんとをゝふこハふゐふゐいきふゝおゝるゐもの乃
なゝふハちゝをゝてやりつ先老のきこひ
ひゝとをゝかゝん

寛政八年丙辰三月
京都二條通富小路東へ入町
吉田四郎右衛門